

# 子どもの研究 (16)

— 身体の蘇生 —

高 田 熱 美

## はじめに

文部省の指導要領は身体の育成について次のように述べている。

まず、小学校の体育（平成10年12月）においては、その目標に「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。」とある。また、中学校保健体育（平成10年12月）では、その目標に「心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、積極的に運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。」と述べ、さらに、高等学校保健体育（平成11年3月）では「心と体を一体としてとらえ、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かで活力のある生活を営む態度を育てる。」を目標としている。

続いて、小学校体育第1学年及び第2学年の目標では、その（2）において

(1)

「だれとでも仲よくし、健康・安全に留意して運動をする態度を育てる。」とあり、第3学年及び第4学年の目標の(2)においては「協力、公正などの態度を育てるとともに、健康・安全に留意して最後まで努力する態度を育てる。」としている。また、中学校保健体育の〔体育分野〕目標(2)においては「各種の運動を適切に行うことによって、自己の体の変化に気付き体の調子を整えるとともに、体力の向上を図り、たくましい心身を育てる。」とある。さらに、高等学校保健体育の体育目標においては、「各種の運動の合理的な実践を通して、運動技能を高め運動の楽しさや喜びを深く味わうことができるようにするとともに、体の調子を整え、体力の向上を図り、公正、協力、責任などの態度を育て、生涯を通じて継続的に運動ができる資質や能力を育てる。」としている。

このように、指導要領にある体育・保健体育のいずれも心と体を一体としてとらえ、運動に親しみ、健康の増進・体力の向上に努め、たくましい心身の育成を図ることを謳っている。それゆえ、体育・保健体育の目標は、統一されたたくましい心身の育成にあるということが出来る。

しかし、このことから新たな問いが生まれてくる。まず、心身の統一、たくましい心身とは何であるか、そしてこの課題はいかにして達成されるかという問いである。したがって、ここでは心身がよって立つ現代の状況を明らかにしながら、統一されたたくましい心身の意味とその育成可能性を探求することにする。

## 1 身体の現在

たくましい心身の育成は心と体の両面からの働きかけが不可欠であることはいうまでもないが、まず身体の間からの接近が先行することになる。ただし、化石人類学が明らかにしているように、ヒトは変化する自然環境のなかでそれ

との相互作用において身体を変え、心をもった動物へと進化してきたからである。それは、ひとつの形而上学の観点からいえば創造する宇宙の過程・結節点であったといえる。

およそ二百万年前、原人（ホモ エレクトス）は大型獣の狩を始めたというが、それは他の動物と違った特異な身体を活用したものであった。そこでは、走る、投げる、跳ぶ、そして、持久する力が求められ、そのことがさらにたくましい身体を形成したであろう。とりわけ男子は狩猟によって瞬発力と判断力を具えた敏捷な身体を培ったであろう。また、女子は衣食の採取と出産・育児という不可避な労苦を負い、安産のための広い腰と授乳のための豊かな胸を発達させたであろう。もちろん、広い腰と胸とは直立歩行、自由に動く手や腕の発達と関わっているのだ。そして、男子も女子も、衣食住のすべてにわたって共同の労苦を分かち持ったであろう。ここにおいて、この人びとはその身体そのものから自己が何者であるかを語っているのである。

現代においては、原始の身体を見ることはない。いまは機械技術の時代である。これは、時間空間を克服する方向へ驀進している。いわば、目的を速く達するということが機械技術の機能である。これは人間の労力の省力化である。ここで必要とされるのは体力や筋力ではなく知力である。それゆえ、人は、かつて活用していた身体をもてあますようになる。身体はたくましいよりもスリムであることが望ましいとされるようになる。また、医療が発達して母親は子どもを安全に産み、育てることができるようになった。少子化現象がこれに加わって、女性の身体に対する見方が変容している。ここでもまた、近代的な知性にあふれる女性と称されるように、知力のうかがえるスリムな身体が望まれている。

しかしながら、人間は身体を使わずに過ごすことはできない。身体を活用し、汗を流し、身体に課題を与え、それを豊かに形成したいとの欲求が消去されることはない。心が身体に収まって、身体によって顕現するものであれば、何人

も身体を看過することはできない。スポーツは、このような状況の中で生まれ、発達してきたのである。したがって、スポーツは、古代ギリシャの都市国家におけるように、都市の有閑市民階級のものとして豊かになったのである。

スポーツは衣食住の確保・生産とは直接の関係はない。それは遊び、気晴らし、祝祭に近い。それゆえ、スポーツは余暇のある不労所得者・支配層のものである。古代ローマの皇帝たちに見られたように、支配層は、住民の慰撫、権力の統合、秩序の維持のためスポーツを興行したのであったが、それは一般住民のものではなかった。住民はそれを見物する側にいたのである。かりに、スポーツが市民の間で行われたにしても、それは兵役に就く者や兵士たちの訓練として活用されたのである。もちろん、市民とはローマの市民権を有した者のことであり、彼らは選ばれた支配層に属していたのである。

現代では、大人から子どもまであらゆる層の人びとにスポーツは普及している。一般大衆は筋肉を使う労働から解放され、なお余暇と経済的豊かさを手に入れたからには、スポーツに向かうのは当然のことであった。

子どもは本来全身を使って遊び、そのうえ大人たちの労働にも参加したものであったが、いまや大人たち以上に身体を使うことがなくなっている。近代化による家族労働からの解放、遊びの場となる自然の消失、遊ぶための子ども集団の崩壊、そして新たに登場した勉強によって、むしろ子どもは大人たち以上に身体の活動を必要としているのである。それゆえ、学校が体育を取り入れ、スポーツを盛んにしようとしたのは理にかなったことであった。

スポーツは、子どもにも大人にも、健康を増進させるだけではなく、ストレス解消、気分転換、気晴らしといった心理的効果を生む。さらに、スポーツは、それを通して地域の成員が結びつくことになるので、共同体の形成にあずかる。また、スポーツは、なにかのためというより、あたかも遊びのようにそれ自体が目的ないし趣味となって日常化された生活を潤すことになる。

このようにして、現代の社会にはスポーツが普及し、それも多様なものになっ

た。これと同時に、スポーツ産業が隆盛を極めることになった。スポーツ教室や施設が生まれ、子どもも大人も多くのスポーツ商品を購入することになった。さらに、スポーツが、企業のみならず学校や地域の宣伝に供され、国家の威信発揚のために支持されている。また、プロスポーツが形成され、メディアを通して大衆の耳目にふれることが容易になった。このため、見るスポーツはさらに普及することになる。

生産を第一義とする社会では、スポーツへの潜在的欲求は高いにもかかわらず、それを行うだけの気力がそがれることになる。それに、時間と場所も不足しているのだ。そのため、ますますメディアを通して見るスポーツへの欲求が高まっていく。こうして、見る事が身体の活動を減少する。

いまや、大人はいうまでもなく青少年層の体力、とりわけ筋力や持久力が減退する。同時に、身体ないし体力に対する価値意識も減退する。たくましい身体は時代遅れとみなされ、それを価値のあるものと見ない限り、そのような身体を形成しようとの意欲も生まれないのである。

もっとも、身体の形成への特殊な追求はある。たとえば、筋肉の美を見せるためのボディビルがそうである。とはいえ、これはまったく特殊なものであって、多くの若者たちは身体をスリムにするためにダイエットに励むのであり、そのために女性のなかには食指不振症になる者も現れてくる。極端な痩せと肥満、これらはいずれも虚弱、不活発、弛緩を感じさせる。

現代の状況はたくましい身体の形成をますます困難にしている。企業が求める人材は、論理的思考力、コミュニケーション能力、そして基礎的学力である。健康であることが望まれるが、たくましい身体が求められることはない。要するに、健康診断書に異常がなければよいのである。大学においても、学力が入学を判定する基準であることはいうまでもない。それゆえ、学校教育は、現実には、知育、徳育、体育のなかで体育を最後の課題におくことになる、とりわけ、上学年になるにつれて体育の地位は下降する。

かつて、古代ギリシャにおいては、少年の教育の基本は体育と音楽であったという。現代においても、幼稚園では体を動かす遊戯と音楽が基本となっている。しかし、現在では長ずるにつれて体育と音楽は主要科目からはずれるのである。

児童・生徒を評価する方法はといえば、それは客観テストが中心であり、このテストは数量として表現できるものを対象にしやすい。そのほか、作文テスト、性格テスト、面接法なども考えられるが、入学試験で体力テストが行われることはほとんどない。健康診断書は最低の条件であって、それに成績証明書を上回る評価が与えられることはない。要するに、学校はたくましい身体の育成を看過しているのである。

現在、児童・生徒の体力は低下をたどっている。それは当然の帰結であって、なおそれで、十分に世の中を生きることのできる時代となったのである。したがって、文部省の指導要領が述べる心と体の一体化、たくましい身体の育成は、知力の育成に比べるとはるかに滞っているのである。学力の低下が問題とされ、学力の向上のための多様な試みがなされてはいるが、体力ないし身体の育成にかんしてはほとんど放置の状態である。

## 2 身体概念の崩壊

旧約聖書の神が、アダムに労働を課し、イヴに出産の苦しみを与えて以来、男性の筋力あふれる身体と女性の豊満な身体はひとつの課題であった。だが、いまは身体にそのような明確な課題はない。スリムで優しそうな身体、なめらかで、やわらかく、よわよわしそうな身体への願望が現れた。かつて、絵画に見られた身体は、硬い筋肉の男性像、豊麗な女性の身体像からしだいに細身のたおやかな像へ移り、やがて抽象化されたものへ変わってきた。身体概念がリアルな生きたものを剥奪して、知的抽象へと変容したのである。

機械技術連関の社会は、身体を抽象化することによって、その機能である触れることを拒絶するようになった。本来、身体は外界にたいして生命が自らを確保する基本的あり方であって、自己と外界との差異を生み出すものであった。そして、その差異を維持しながら他と交わるのが身体の触れることであったのである。このことは、ウィールスや原核菌にさえもいうことができる。これらは、ある種のかたちをもち、外界に対峙し、ふれることにおいて外界と交接してきたのである。それゆえ、ふれること感覚器官である触覚は、有機体としての生命が外界としての環境と関わり、そこから生命の糧を得、エネルギーを生み出し、なおその環境にたいして自己を維持するありかたであったのである。

ところが、現代の環境は、科学技術によって産出された加工物であり、かつてこれは自然界にはなかったものである。純度の高い金属製品、塩化ビニール、プラスチックなどの石油製品、ガラス製品、コンクリート、アスファルト、これら抽象的な人工物が環境を構成している。さらに、エネルギーも情報も機械技術連関によるものであり、有機体としての生命が交接できないものになっている。この機械技術を発展させた感覚は視覚であり、この点で、進化史においては遅れて発生した目という器官が、ほかの感覚器官を圧倒して働いていることになる。

現在の外部環境は身体性を排除していくのである。人工の製品は機械によって作られたものであるため、硬い。それは、物理的固体としてだけでなく、音や味や匂いにおいてもかたいのである。このことは、テレビから流れる風や波の音と自然の風や波の音とを比べてみるまでもないことである。また、硬い製品は湿気を吸わないため乾いている。さらに、これらの製品は熱伝導が高いため、極端に熱くなったり、冷たくなったりする。しかも、これらは、なめらかで、つるつるしていて、手ざわりはよくない。いわば、生命が触れることを拒むのである。そのうえ、これらの製品は、いったん疵がつくと壊れやすくなり、壊れたものは身体を傷つけやすい。金属、ガラス、プラスチック製品など

はその典型である。水や空気さえ、機械から流れてくるものはかたい。そのため、現在の環境は、身体性の観点からみれば、人間が安らぐところではなくなったのである。それは、人間自然（Human Nature）の後退である。

現在の外部環境は、身体が交接する場を奪うのみならず、身体そのものが働くことを排除している。元来、目的をできるだけ速く、労を少なくして達成するということは生命の基本的ありかたであり、それができない生命は滅ぶほかはなかったであろう。この意味で、機械技術連関は生命の基本的ありかたを原点としたものであって、この威力は絶大というほかはない。これによって、人間は身体のエネルギーのほとんどを不要とするところまできている。

歯を食いしばり、額に汗し、力を振り絞るような全身の労働は現在から遠ざけられている。実は、力を振り絞るというのは、身体だけではなく心においてもなされている。人が全力を挙げるとき、その人の心身は統合されているのである。

ところが、機械技術連関の社会においては、労力を限りなく節減することによって、心と体とが乖離し始めるのである。しかも、それだけではなく身体も細分化する。

まず、機械技術連関は人間の機能を細分化する。そもそも、近代産業が機械の投入によって発展したとき、それは分業を方法としたのであった。高度生産システムの発展とはたえざる分業化なのである。それによって、社会も生活も、そして身体も細分化する。生産と消費、勤労と娯楽、仕事と遊び、集団と個人、大人と子ども、宗教と学校、広間と個室、朗読と黙読、これらは、いずれも機械技術生産システムが分業を推し進める過程で分立してきたものである。この結果、身体も特定の機能を果たす器官に解体されることになる。ちなみに、手の機能は指先に限定されて、キーやボタンを押すことに終始している。文字を表すことは指先だけで可能になった。目は記号を見ることに費やされる。

かつて、人びとは、自然のなかで手をかざして陽の光を遮りながら、背を伸



ばし、はるか彼方を見やり獲物の動きを読み取ろうとしたことがあったであろう。ここには、目と手と身体のすべて及び心との統合的協働があった。だが、いまはそのような協働が可能であるような場はない。目と手が機器を操作するために働き、心の面ではわずかに技術的知がそれこそ機械的に働いているにすぎない。

機器の発達人は人の身体性をかぎりなく剥奪する。これによって最後に残るものは脳いわば心だけということになるであろう。これは、あらゆる人間的なものの捨象である。<sup>1)</sup>

機械技術システムの高度化によって、人間の身体が機器を操作する道具もしくは機器に代替可能なものになるということは、それが経済ないし効率の観点から見られているということである。身体が機器や道具になるということは、文化や宗教や自然（たとえば男女の性差）などから無縁になるということであり、したがって身体が製品すなわち商品として売買可能になるということである。

現代の科学は、その独自の世界観と方法によって身体を裁断し、分析・無機化・抽象化・量化を進めてきたのであったが、これは身体の改造を可能にする。わけても遺伝子操作、分子レベル治療、臓器再生、クローン技術の開発などは身体の改造に威力を発揮するのである。

こうなると、身体は鍛錬によるのではなく、金銭で売買できる商品によって維持されることになるであろう、そうであるとすれば、自己の身体はどのような課題をもつことになるであろうか。もはや、身体の肥満ややせは容易に克服されるであろう。やせ願望は手軽にかなえられ、食思不振症も消えるであろう。食思不振症でさえ、病であるとはいえ、自己の身体を苦しみながら変えようとする試みであったのである。

願望や欲望は十全にかなうとき消滅するものである。けだし、願望や欲望は、まさにそれが現実において容易に達成できない状況にあるとき生まれるものだ

からである。もっとも、人間の欲望には限りがない。それは「無限の動因」<sup>2)</sup>であるという。そのような欲望が身体をその対象にしなくなったとすれば、身体はいかなるものになるのか。機械化・抽象化され、ただ商品としての価値しか有さないものになるのか。だが、やがてこの問いも消滅するであろう。なぜなら、科学技術の進歩は身体の商品価値さえも無にする道を開いているからである。身体のをすべてを科学がつくりあげるのである。

人間の欲望が限りないことからすれば、人は無限の若さ、限りない命、完全な健康を求めることになるであろう。このため、人は身体を遺伝工学や生物物理学などを駆使して再生ないし保持しようとするであろう。ここでは、身体の良さは機能の良さであり、これは金銭で手に入れた商品であるから、身体にかんして誇るべきものがあるとすれば、これは金額の高さということになるであろう。ここに至ったときには、もはや身体の問題は崩壊してしまっているのである。

自己の身体が買い求められたものであり、それは機能的なものほどよいと評価され、それも新しいものに更新されるものであるとすれば、人はこのような状況に耐えうるであろうか。

いまや、人は心と体の乖離のみならず体つまり身体が分裂する危機に出会って、漠然とした不安を感じ始めている。これは自己の存在の深みから生まれている。身体は自己がよって立つ現実的地平であると同時に自己そのものであって、それゆえに身体の分裂は根源的不安となるのである。

人は自らを自己自身、身共あるいは身一つといい、相手を御身と語ったりする。そして、ことに際しては「身がかわいい」「身を入れる」「身に余る」「身に覚えがない」「身にしみる」「身になる」「身を語る」「身を焦がす」「身を削る」「見も細る」「身の置き所がない」「身につまされる」「身を捨てる」とのべ、ときには「身が震える」「身を誤る」「身も世もない」「身を投げる」などといったりするのである。これらのことは、身体が心と体および他者すなわち共同体

とのかかわりを現していることを明らかにしている。

ところが、現代のように、身体概念が崩壊の危機にさらされているときには、身は裁断され、身についてのことばは消滅するであろう。移植され、再生され、取り付けられた部品の集合となったような身体の状態においては、「身がかわいい」とか「身につまされる」などといったことばが成立するはずもないのだ。

本来、自己は身体そのものであった。身体は自己が何であるかを語り、自己が生きてきた事実を証すものであった。日焼けた皮膚、額の深いしわ、節くれだった手、柔らかい手、白い肌、広い胸、分厚い足の甲、これらはいずれも自己の生の痕跡ないしわたしの物語である。

自己が自己であることは、物語すなわち時間の流れのなかにあって、いまここという過去と未来の結節点を生きることから確かになるのである。それゆえ、自己であることはたんに私の過去を記憶していたり、未来を推量したりすることにつきない。それは、いま・ここにある私の身体概念の物語を開示することである。このためにこそ、身体概念が崩壊するであろうとの予感に対して、言い知れぬ不安が湧き出るのである。

身ということばについていえば、身体概念の中心に心があることがわかる。すなわち、胸に一物がある、腹をさぐる、腹がすわる、腹におさまる、腹がおさまらない、腹が立つ、腹がわるい、腹がふとい、腹にすえかねる、腹をあわせる、腹をきめる、腹をくくる、腹をわる、などと人びとは語ったのであるが、身体概念の崩壊によってこれらのことばも消滅するであろう。そして、心は頭に移行することになる。人は「頭にくる」というのである。また、さらにはそれさえも消去されて、ただ、「むかつく」といった漠然たる生理的兆候の表現になってしまう。ここには、心の居場所はない。

この意味で、心の崩壊と身体概念の崩壊とは同義である、心の崩壊が如何に身体概念の崩壊に至るかは、統合失調症の患者の場合を見れば明らかである。

たとえば、精神病理学者のミンコウスキーは、これらの患者の身体感覚について次のように語っている。

「これは決して小説の一節ではない。終日全く無為に臥床している一患者の言葉である。彼女の離床するときの姿は、まるで自動人形のようなものである。この患者には幻聴と化身妄想がある。また彼女は看護婦の目を盗んで、自分の着物に火をつけたことがある。こうすれば自分から失われた生き生きとした感覚が感じられるだろうと思っていたのだと彼女は言った。」<sup>3)</sup>

ここでは、触覚や痛覚といった身体感覚が自己から遊離している。これは実在と自己との遊離である。それゆえ、温度計を見て今何度だと言えるのに、暑いとか寒いとかを感じないことが起こる。音楽を聴いても、いろいろの音が耳にいただけで何も感じない。物を見てもそこに物が実在していると感じられない。時計を見ればいま何時かわかるが、時間が経って行くという実感がない。そして、しだいに自分があるということがわからなくなる。

口腔感覚を基底にして心の病を解読しようとしたテレンバッハも同様なことを述べている。

「精神病がよくなってからこういう患者たちにもっと立ち入って聞いてみると、口腔性の感覚機能の量的低下などは問題外だったことがわかる。そんなときたとえば「私はどんなにおいでも嗅ぐことができたのに、もうにおいがわからなくなりましたし、またどんな味でもわかっていたのに、その味がみんななくなっていました。」などと患者はいう。しばしば、似たような障害がほかの感覚領域でも起こる。目に見えるものはいつも薄暗い。聞こえるものは患者には「遠くからのように」響いてくる。触覚は鈍く体験される。ある女性患者は、洗濯物をつるす際、それをいつものようにちゃんとさわっている感じがもう全然しない。両手は『つんぼみたい』だと訴える。」<sup>4)</sup>

人は、日常生活においても反省的知を用いて心と体、すなわち精神と身体・感覚とを分けることができる。両者の分離は意識においてなされるのである。

しかし、真に日常生活を生きるとき人は自身そのものである。そこには精神と身体との対立・疎外はない。人は田園の小道を歩むとき、右足と左足を意識しながら足を交互に動かしているのではない。さわやかな自然に誘われて身はいつの間にかそこへ向かい、足はひとりで動いているのである。子どもの頭に手をやって祝福するとき、手は自己の道具ないし器官ではなく自己自身である。待ち焦がれていた料理にありついたとき、私は舌となり胃となって食物を受容する。このとき、私は舌の味覚神経の電気的変化や胃のなかでの食物の化学変化を意識したりはしない。本来の感覚とは自己自身なのである。ここには統合された身体と自己すなわち自身がある。

心の病は自己と身体との乖離、したがって世界との乖離となって現れる。それは終局には実在の否定となるであろう。また、身体の病においては実在の限定が生じてくる。たとえば、ヘレン・ケラーの世界は闇と沈黙の世界であった。しかし、これは実在そのものを否定することではない。彼女はなお豊かな生を享受することができたのである。そこには快と苦と感動と興奮の生があったのである。

ところが、心の病は生そのものを変質させる。むしろ生と正反対の虚無へと変貌させる。実在の否定とはこのような意味であって、現実絶望して死に至ることではない。それゆえ、心の病において、人は実在から遠ざかり、虚無を生きることになる。そこでは身体も変質してしまうのである。たとえば、渡辺哲夫は女性の統合失調症患者のこぼれ話を記録してつぎのように述べている。

「顔が崩れて大変……脳の芯棒が壊されて気絶しちゃうそうで、……内臓が壊されて脚が死んじゃったんです。私、こないだ死んだらしくって……。脳髓が散らばっちゃって、全身穴ボコだらけです……。」<sup>5)</sup>

ここで語られていることは身体ではなく肉体である。ここには自己はない。自己も身体も崩壊している。「私」ということばは使われてはいるが、この「私」は無意味であり、まさに死んだことばである。自己も身体も肉体のなか

へ解消されてしまったのであるか。患者にとって解体した身体の断片すなわち肉体が唯一のリアルな実体のように語られているが、自己はその肉体にかすかな影を宿しているにすぎないのである。同じく渡辺哲夫はこのことを次のように語っている。

「実際、肉体即自我ということはS（患者）に触発されて注目し始めたのであるが、分裂病患者の最も重要な特性であると思われる。『姿が見えない』と言われて、『殺された』と興奮する者、『私が見つかりました』とビニール袋に尿を容れて持ってくる者、下痢をして『自分が流れていっちゃった』と極端に不安に陥る者、全裸になって『オレを生んだ』と叫ぶ者、など枚挙にいとまがない。」<sup>6)</sup>

もはやここには、身体の喪失を気にする自己はない。身体ではなく肉体が語られている。語られていることばは、「気絶しちゃうそうで」のように三人称つまり他者のことばである。したがってこのことばは死んだことばである。

身体は自己が生きる住み家である。身体は自己を守る防壁であり、そのことによって自己は他者から自由であることができる。同時に、身体は自己を表現し、具体化し、環境と交流する現実的実在である。それゆえに、自己は身体そのものとして、自己自身となるのである。したがって、顔において人は自らの人となりを表すのであるし、姿勢や歩き振り、かすかな仕草にさえもその人が何者であるかが語られているのである。このことから、身体及び身体概念の崩壊が精神の不安のみならずその崩壊さえも招くことが明らかであろう。

### 3 身体の課題性

身体および身体概念の崩壊という危機に際して、文学や芸術いわば建築、絵画、彫刻、音楽、写真、演劇などが人間の身体性の回復を試みている。だが、その試みは模索の状態である。文学のあるものは暴力と性の描写によって身体

性を赤裸々にするが、これは、むしろ心身すなわち身への統合ではなく身の劣化を、したがって希望ではなく動物性をも脱した肉化への絶望を語っている。身体の抽象化、細分化が身体の現実性を侵食しているのである。

このような状況のなかで、子どもは特異な世界に生きている。子どもは自然そのものである、大人たちはその自然をあるがままに受容する。乳幼児を見れば明らかであるが、ここには男でも女でもない子ども特有の身体がある。丸々としたふくよかなからだ、柔らかい指、ふとってくびれた手や足の首、このような身体は自然そのものであって、人びとはその自然をよしとするのである。

子どもは、やがてはいはじめ、つきにはたち、そしてあるくようになるとその行動は活発になる。はしりまわり、甲高い声を出し、なににでも手を出したがる。このため、子どものいる部屋は突風が吹きぬけたように荒れ放題になる。ここにも子ども特有の身体がある。

大人たちはこれをもまたよしとして受容するのである。自然であること、損なわれていない自然の身体を大人たちは子どもに見るのである。

ところが、少年期になると自然性はしだいに特殊な方向へ分化される。男子の広い胸、たくましい筋肉、えらの張ったあご、鷹のような目、精悍な風貌、また女性の豊満な胸、広い腰、はちきれそうなでん部、やわらかくふくよかな身体といったものは自然のなかで人間の自然性そのものが形成され、発現したものであったが、今ではそれは原始・古代社会の遺物と目されるのである。

現代の社会はそのような自然的身体を求めてはいない。それは社会一般の美意識から外れている。したがって、この社会は身体の自然性を喪失しているのみならず、身体を形成する課題をも見失っている。

現代の社会が求めているものは身体ではなく脳の働きである。すなわち知的能力である。この能力は、主として機械の操作に関する能力であって、これは身体の働きからもっとも遠いところにある。この能力は視覚によって記号を読み取るのであるが、その場合、記号は光であり、これは視神経から脳神経を経

由して大脳の新皮質にだって情報となり、処理される。したがって、知的能力は刺激が脊髄神経を経由して感受する触覚、つまり身体感覚とは対極にあるのである。それゆえ、知的能力は人間性（Human Nature）から遠いところにある。人間性はまさに人間の自然としてその人の身体に現れるのである。このため、知的能力のみを課題として、その活動に評価を集中するとき身体は人間性を喪失する。それは人間の機械化である。また、これは人間性の喪失ということにおいて動物化である。現代では身体の機械化と動物化が進行しているのである。

身体は魂が生きる場であったが、身体の課題の喪失と魂の衰退とは随伴している。精神の張りのない身体、魂の質量の希薄な身体が巷間に現れ始めたのはこのためである。ここには、無気力、無感動、刹那的な暴力が瀰漫する。

身体其自然性すなわち課題が喪失したとき、身体に残されたものといえば病気をしないこととしての健康である。そして、この健康な状態をできるだけ延ばすことが生の目的になる。健康は何かを達成するためにあるのではなく、日常を楽しむためのものになり、やがて健康のための健康、いわば健康そのものが目的になる。健康食品や健康用の機器が一般に普及するものもそのような状況を反映している。身体は使うものではなく、食べ物など日々の楽しみを享受するものであれば良いとすれば、健康は受動的になり、ついには抽象化されるのである。

#### 4 身体の蘇生

身体の蘇生と精神の蘇生とは相即している。もちろん、このことは身体が頑健で、運動能力に秀でた者が精神的に優れているということではない。また、豊かな精神の持ち主が身体において強靱ということでもない。身体と精神の相即とは身体が精神を具体化しているということ、すなわち身体が精神を支え、



精神が身体を支えている現実を意味するのである。

このような現実には精神が如何に身体を有らしめ、身体が如何に精神を生かしているかを語っている。それゆえ、病弱な身体はそれなりに精神を支え、精神は身体にそれなりの課題を与え、身体を生かしているのである。

身体の蘇生は身体に課題を与えることから開始される。この課題は精神によって与えられる。ゆえに、間接的課題である。このことは、身体の蘇生に精神の蘇生が先行することを意味しない。発達段階からいえば、児童・生徒においては身体の形成が精神のそれに先行する。精神は身体の形成に随伴するか、ややそれに遅れて生成する。これが、知的学習が延長した現代社会の実情である。

身体の課題は、児童・生徒を教育する大人たちによって与えられ、長じたあとには自ら課題を発見して身体を形成するのである。したがって、身体の課題は、精神の課題のなかで意味を持ち社会的責任のなかで発現するのである。

身体の課題は社会的責任の実現と関わっている。それは機械技術連関が浸透した現代においても正当化される。現代の環境破壊・汚染、自然の収奪を克服し、環境と自然を蘇らせるためには、機械技術によるだけではなく身体すなわち人手を尽くした働きを欠くことができない。したがって、教育はそのような状況へ児童・生徒を導く任務を負うことになる。このような経験から児童・生徒が得るものは学力そのものではないが、それは学力を支える基盤となるのである。この経験を通して形成された身体は抽象と形式の枠で働くハードな知を練り直すのである。

自然の蘇生および自然との共生が人間の自然すなわち身体を蘇生する。もちろん自然とは、草木叢林の萌える山や河や海に限られるわけではない。人間も自然であるから、乳幼児の養育、老いた人や障害者の介護と看護も自然の体験である。このような体験において身体は責任を負うべき存在となっており、その課題を明らかにする。すなわち、身体の課題は他者ないし集団に対する責任を負うことにおいて現れ、そのなかで身体が蘇生されるのである。

かつて、ペスタロッチィは『体育論』のなかで子どもの勤労体験の大切さを説き、他方でスポーツを次のように批判したことがあった。

「上流階級に見られるのは絶対に正常には歩行できない舞踏家、泳ぐことのできない騎士、いかなる木も斧で切り倒すことのできない剣闘士、自分の生活のためにはひとすじの草をも刈りとることのできない登山家…」<sup>7)</sup>

たしかに、スポーツは生産労働ではない。それは社会的責任にかかわりのない活動である。スポーツは、かつては祝祭のなかの行事、生産労働に従事しないので余暇のあった支配富裕層の趣味、あるいは戦闘の訓練としてあったのである。もっとも、現代では勤労生産大衆に余暇と富が生まれ、その上身体の労働から解放された状況があり、そこではスポーツは欠かせないものになっている。祝祭と趣味と戦闘の訓練から派生した多くのスポーツは、現在では変容して大衆の健康と娯楽と社会的行事になっている。

社会的行事としてのスポーツは大衆を動員して国家ないし国際的規模のものへも拡大している。ここには、演じる (play) 者と見る者との祝祭的興奮が生まれる。このような状況は機械生産システムが強化され、合理性や能率化が進むにつれて日常的になるであろう。これは、人と人を一時的に結びつけ、共同体的感情を醸成するのである。これは、ミスを許さない合理的操作から開放され、利潤や一義的目的を求めない生のなかに人びとを導き、安らげるのである。

現代では、スポーツは娯楽であり、健康増進であり、共同体の育成であり、ある者には職業である。それは、日常を離れた特定の時間空間の中で成就される。そうであるため、スポーツは実利を離れた虚構となり、遊びや祝祭になりうるのである。これはスポーツを職業とする人にもおこりうる。それだけに、スポーツは現実生きることに、すなわち世界ないし社会に対する責任の意識を希釈する。しかも、ルールにしたがって行われる特定の身体運動は、ペスタロッチィが指摘したように、現実の生きた身体感覚を遠ざけるのである。それゆえ、身体の蘇生は、世界に対する責任が織り成す現実のなかで進められる。

## む す び

身体の蘇生は現実のなかで可能となる。現実は、多様な身体感覚の働きを可能にし、それとともに世界ないし社会にたいする責任の意識を要求する。このような現実に入り込むことによって、人は心身の統一に向かい、張りのある精気に満ちた身体を保つのである。

この現実、人間性つまり人間自然が生きることのできる自然の蘇生と関わっている。自然への回帰は人間自然すなわち身体性の回復である。それゆえ、教育は、あらゆる生命が生きる自然を蘇らせるため、カリキュラムを作成し、その実現へ子どもたちを参加させるべきであろう。さらに、人間も自然であって、このため乳幼児や老人、障害者などに対する支援、助成、養育、介護の体験が企画されねばならない。ちなみに、かつて子守は子どもの仕事ではなかったか。もちろん、開発途上国ではいまでも子守は子どもの仕事である。人間をふくめた自然との対話、そこで学ばれる身体活動の豊かさと責任意識の醸成が心身の統一を可能にする方策である。

## 注

- 1) 松本零士『銀河鉄道999』 倉橋由美子『ポポイ』 フォスター『ザ ディグ』などにはそのような事態が描かれていて興味がある。
- 2) B. Russell, Human Society in Ethics and Politics, George Allen and Unwin Ltd, London 1954 p.161
- 3) E. Minkowski La Schizophrénie, Psychopathologie des schizoides et des Schizophrènes Nouvell Edition, 1953『精神分裂病』村上仁訳、みすず書房、1954 pp.87-88

- 4) H. Tellenbach, Geschmack nud Atmosphäre, 1968『味と雰囲気』宮本忠雄・上田宣子訳 みすず書房 1980 pp.140-141
- 5) 渡辺哲夫『知覚の呪縛』西田書店 1986 p.120
- 6) 渡辺哲夫 同上 p.121
- 7) J. H. ペスタロッチー「体育論」吉本 均訳 平凡社 ペスタロッチー全集Ⅱ p.315